

# 日本の山岳信仰と温泉

鈴木 健郎

## 1 「治癒文化」の広がり——山岳信仰・温泉・寺院・神社

日本社会の歴史において、「治癒」に関わる文化と土地は、宗教・巡礼・伝説・文学や経済・交易・観光と結びついて重要な役割を果たしてきた。「治癒」の拠点として重要な役割を果たしてきた温泉・湯治場も、火山や鉱脈や地下水などの自然環境、宗教・治療・民俗・地域社会・経済・伝承や文学と結びついてきた。国土の大半が山であり、世界有数の火山地帯として多数の温泉を有する日本では、山岳信仰に関連する多くの寺院や神社が、温泉との地理的・文化的関連性を有し、宗教文化と温泉文化が聖俗一体となって、社会・地域の活性化・再生と関係する。

日本の山岳信仰においては、山体や大岩（磐座）や洞窟や火口などの崇拝とともに、瀧・淵・湧水・泉など水に関わる聖地・霊場が多く見られる。聖地・霊場・霊泉としての温泉は、「火」と「水」の信仰の要素を同時に有し、さらに山岳や岩石の崇拝とも結合しうるものである（顕著な例として湯殿山がある）。また、温泉の湧出する場所は、硫化水素などの火山性ガスを噴き出す場合には（実際に動植物が死んだりすることやその荒涼たる景観から）死の世界への入口あるいは「地獄」のイメージと結合することが多いと同時に、心身の疲労や負傷や疾病に対する温泉の治療効果からは「再生」「治癒」「救済」がもたらされる神仏の加護を実感する聖地として伝説化され、地藏信仰・観音信仰・薬師信仰などと結合する。

近代的な医療システムや公衆衛生が整う以前の日本社会では、現代の観光産業化した高級・贅沢な「温泉」のイメージとは規模も意味も大きく異なり、一部の貴族や富者だけではなく、庶民、負傷者や病者など、あらゆる階層の人々が治療・治癒のために頻繁に湯治場に通い、これに宗教的救済や地域経済が結びついた、「治癒文化」の領域が存在していた（特に江戸時代以降には庶民層までを含めた「旅」「巡礼」「湯治」が一般化し、飛躍的に大規模化する）にもかかわらず、その空間的な広がりや通時的な変化の様相についてはよくわかっていないことも多い。地質・化学・医学など科学的な温泉学や観光的な研究などに加えて、宗教史や地域社会史の中で「治癒文化」が果たしてきた重要な役割の認識と研究の意味は大きい。

専修大学社会科学研究所の助成による共同研究「社会における「治癒」文化の総合的研究—聖地・交易・復興拠点としての寺院・温泉・共同体」（2015–2017、研究代表；鈴木健郎）では、青森、秋田、岩手、山形、長野、栃木、群馬、和歌山、三重、石川、新潟、福岡、大分などで、

「治癒文化」の様相を実地調査した。限られた調査とはいえ、各地域において、湯治場・神社・寺院・観音信仰・薬師信仰・地蔵信仰・山岳信仰・民俗・文学・地域社会・経済などが、密接関連してきたことを確認することができた。

- ①長野県の秋山郷（平家落人伝説あり、江戸時代に鈴木牧之『北越雪譜』『秋山紀行』の紹介で著名な豪雪地帯）、霊泉寺（平維茂伝説、龍伝説、温泉神社）、別所温泉（円仁開創とされる大師湯や北向観音が複合的に治癒文化を形成している）
- ②岩手県の繫温泉（前九年の役に関連する開湯伝承あり）、秋田県後生掛温泉（八幡平。恐山巡礼と関連する伝承あり）、尾去沢鉱山（行基伝説、怪鳥伝説、隠れキリシタン史跡あり）、青森県の嶽温泉（岩木山麓、狐の導きによる開湯伝説）・アラハバキ神社（鉄生産や交易と関連）・岩木山（岩木山神社の至近にも百沢温泉、境内にも温泉あり）
- ③三重県鈴鹿山脈の湯の山温泉周辺（伊賀・甲賀ルート、御嶽信仰、修験道）および和歌山県吉野（金峯山）・十津川温泉・熊野（修験道奥駆ルート、熊野神社・速玉神社）や沿岸部の補陀落渡海関連寺院（補陀落山寺）
- ④栃木県那須岳山中の大丸温泉・北温泉・那須温泉湯本の「鹿の湯」と温泉（ゆぜん）神社（白鹿と狩人による発見伝説）・賽の河原と殺生石（火山ガスの噴気、九尾狐の伝承）、古峯神社（古峯ヶ原。日光修験、火伏信仰・天狗信仰）
- ⑤石川県の白山比咩神社（白山信仰）、山中温泉（行基による開湯伝説、薬師信仰、芭蕉が永平寺に向かう途上に滞在）、福井県の永平寺

などを調査した。（2014年には、共同研究の予備調査として、現在も治病の湯治場として活動中の群馬県の「釈迦の霊泉」、および古来の草津温泉（行基伝説・薬師信仰・頼朝伝承・湯治文化・ハンセン病関係施設など）などを調査した。

修験道・山岳宗教の民俗・歴史、陸・川・海交通・交易ルートと宗教・信仰の圏域の関連、鉱山文化、火山崇拜などが、日本における温泉・寺院・共同体の治癒文化と密接な関連を有する。全国的な修験道や仏教の布教・巡礼ルート、陸や海の交易ルート、渡来文化、中国・朝鮮半島との交流も視野に入れながら、共同研究の終了した2018年度にも、個人研究として、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）や九州の英彦山など山岳修験の重要拠点を中心に、実地調査と資料収集をおこなった。

温泉（治癒）と宗教（救済・信仰）の結びつきについては、特に温泉神社・温泉寺や地蔵・観音・薬師の信仰、温泉経営と寺社の関係、開湯伝説の伝播と勸進聖・遊行僧・修験者の関係などの視点からの研究がある。<sup>1</sup>また、日本の山岳信仰や修験道に関しては、全般的な歴史・修行・儀礼・教義・組織・社会活動などの研究から個別具体的な各地の山岳信仰・修験者の活動の様相と地域間の相互交流およびその歴史的变化などについての詳細な研究の大量の蓄積があ

る。<sup>2</sup> これらの先行研究の蓄積を踏まえつつ、本論では、中国の道教の山岳信仰などの影響についても、簡単に整理しておくことにしたい。日本の山岳信仰や修験道は、中国の仏教や道教の多大な影響を受けていると考えられるが、この点に関する研究は非常に少なく、基礎的な事実がよくわかっていない部分がある。筆者の専門分野は、宗教学の観点からの中国道教の研究であり、これまでに科研による調査などで中国道教の山岳聖地（山中の洞窟が仙界と通じるとされ、また優れた気の流れている修行に適した場所として、「洞天」・「福地」と呼ばれる）の多数を調査した経験がある。<sup>3</sup> 中国の山岳聖地でも、日本と同様に、水や泉への信仰は普遍的に見られる。一方で、中国にも火山は存在するものの、<sup>4</sup> 世界有数の火山地帯の日本と比べるとその数は少なく、温泉も存在するが、<sup>5</sup> 地質的条件や自然環境、地理的景観や開発利用の歴史や状況はかなり異なっており、日本のような山岳信仰と温泉・湯治場の密接な結びつきが頻繁かつ顕著に見られるということはない。

中国の山岳信仰や道教も、日本の山岳信仰や修験道も、温泉・湯治場や神社・寺院や地藏・観音・薬師信仰などの複合からなる温泉聖地も、人間によって歴史的に形成されてきたものであり、太古から不変に存在してきたものではない。資料の制約から解明しきれない古来の要素を有していることを考慮しつつ、文献記録や考古学的資料によって、地域や時代による差異や変化、歴史的形成過程を考察する必要がある。無論、温泉・山岳信仰の調査研究も、中国の山岳宗教・道教の調査研究も、対象となる範囲や事例が膨大であり、継続中・継続予定の研究課題であるため、これらを総合的に考察して明確な結論を出すには更なる研究が必要であるが、本論では、現段階での共同研究の報告として、日本の山岳信仰と治癒文化の形成史に関する基本的な問題の整理を試みたい。

## 2 中国と日本の山岳信仰——道教・仏教・修験

山岳崇拜・山岳信仰というものを、その起源まで遡って考えるならば、農業社会以前の狩猟採集社会や治水が整わず平地が頻繁に洪水に見舞われていた社会にあっては、そもそも山や丘陵のほうが居住や生活に適していた時期の存在や、太古から存在した火山噴火に対する畏れとそれを司る神霊への崇拜などを想定することが可能である。そうした意味では、日本の山岳信仰も中国の山岳信仰も、ともにはるか昔に遡る要素を含んでいることは確かであるが、残念ながらその詳細はよくわかっていない。

日本で、仏教系の山岳修行者が活動し、ある程度の教義・儀礼・修行の体系を備えた「山岳宗教」の個人的・集団的な活動が現れてきたことが考古資料や文献記録によって確かめられるのは、6～7世紀ごろとされるが、<sup>6</sup> 中国ではこれよりはるか以前の時代に、五岳祭祀や仏教の

山岳寺院、道教の洞天福地信仰など、大規模かつ体系的な山岳崇拜・祭祀が成立している。宗教の領域に限らず、日本の広範な文化や制度、社会や「国」の形成と成立が、古くから中国や朝鮮半島との交流と密接に関連していることは広く知られているが、中国の山岳信仰の歴史とその日本への影響についてはよくわかっていない点が多い。日本と中国の交通、温泉信仰関連の要素と合わせて、まずは基本的な概略を年表形式で整理しておく以下のようなものである。

### 【山岳信仰・温泉関連年表】

- BC247 秦王政（後の始皇帝）が即位、驪山（現在の西安近郊）に陵墓の造営を開始。
- BC221 始皇帝の中国統一
- BC219 始皇帝が泰山で封禪を挙行。徐福らを東海に派遣。（和歌山・東北など日本各地に徐福渡来伝説）
- BC110 漢の武帝が封禪を挙行。（山東省泰山）
- 317 葛洪『抱朴子』（仙人・鍊丹・山岳聖地など豊富な内容→日本へも伝来）
- 364 楊羲が茅山で神仙の降臨を受ける（→上清經典群の形成、神託は後に『真誥』として編纂）。
- 437 陸修静(406—477)が道教經典を整理して目録を作る（『靈寶經目序』）。
- 442 道士の寇謙之が北魏の太武帝に法籙（道教の位階の証明）を授ける。
- 446 北魏の太武帝が道教を信奉し、仏教を弾圧。
- 318 道士の陶弘景が茅山（江蘇省鎮江）に入る（『真誥』を編纂）。
- 508頃 北魏で道教石像が盛んに作られるようになる。
- 574 北周の武帝が道教を信奉し、仏教を弾圧。
- 413～502 倭の五王（讚・珍・齊・興・武）の南朝への入貢
- 6世紀（538?） 佛教の公伝
- 600 第一回遣隋使（『隋書』）
- 602 推古朝に百済の觀勒が曆本・天文地理書・遁甲などの方術書を将来。
- 607 第二回遣隋使（『隋書』『日本書紀』）
- 630 第一回遣唐使
- ・太宗（在位 626—634） 646『晋祠銘』、648『温泉銘』（※驪山温泉）
  - ・舒明天皇（在位 629—641） 631・638 に有馬温泉に行幸（『日本書紀』）
  - ・孝徳天皇（在位 645—654） 647 に有馬温泉に行幸（『日本書紀』）
- 660 百済滅亡
- 663 白村江の戦い
- 319 唐の高宗が各州に官設の寺と道觀（道教寺院）を建設。
- 668 高句麗滅亡
- 672頃 天武天皇が陰陽寮（令制官司の1つで天文の觀測・曆の作成などを担う）を設

- 置。
- 675 新羅による朝鮮半島統一
- 698 渤海建国 (→遣渤海使)  
えんのおづね えんのぎょうじや
- 699 役小角 (役行者) が妖言をなしたかどで伊豆に流される。
- 717 行基の活動が僧尼令に違反するとして糾弾される。  
げんそう しほしやうてい
- 721 唐の玄宗が道士の司馬承禎(647—735)から法籙を受ける。
- ※ 司馬承禎『天地宮府図』;「洞天福地」の体系 (十大洞天・三十六小洞天・七十二福地)。
- 733 『出雲国風土記』成立 ※出雲玉造温泉の記述
- 735 日本の遣唐使が『老子道德経』と天尊像を玄宗に請い受ける。
- 738 唐使が新羅に『老子道德経』をもたらす。
- 743 玄元皇帝(老子)の降臨を承けて、崇玄館 (道教の大学) や道観を整備。
- ・玄宗 (在位 712—756) (道教崇拝、「楊貴妃・華清池」→白居易「長恨歌」)
  - ・聖武天皇 (在位 724—749) 741 国分寺建立詔、745 東大寺大仏開眼
- 743 行基が東大寺の勸進となる。
- 749 行基 (668—) 没。 →【各地に行基開湯伝説】
- 753 遣唐使の藤原清河が、鑑真とともに道士を日本へ携行せよとの玄宗の求めに対し春桃原らに道教を学ばせるとして拒絶。  
ふじはらのきよかわ かんじん  
しゅんとうげん
- 797 空海『聳誓指帰』(→三教指帰) 成立。吉野の金峰山や四国の石鎚山や室戸岬などで修行。
- 804 空海が入唐。806 帰国。
- 806 白居易「長恨歌」
- 816 円仁が最澄に従って東国 (下野など) を巡る。
- 822 最澄 (767—) 没
- 835 空海(774—)没。 →【各地に弘法大師開湯伝説】
- 838 円仁が入唐。(『入唐求法巡礼行記』838~847) ※遣唐使の最終回
- 840 円仁が五台山を巡礼。さらに長安へ赴く。
- 320 唐の武宗が道教以外の諸宗教を禁止(会昌の廃仏)。
- 847 円仁が帰国。(その後、関東・東北に多数の寺院を開基したとされる)
- 864 円仁 (794—) 没。 →【各地に円仁開湯伝説】
- 891 円珍 (814—) 没。
- 889—897 (宇多天皇寛文年間)『日本国見在書目録』藤原佐世 (?—892)
- 918 相応 (831—) 没。法華経・断穀・回峰行 →※「千日回峰」
- 985 源信 (942—1017)『往生要集』成立。 ※極楽・地獄のイメージの流布。念仏による往生 (浄土) を説く  
あへのせいめい
- 989 安倍晴明(921—1005)により、泰山府君祭 (延命や解厄などを祈願する陰陽道祭)。  
あべのせいめい たいざんふくんさい
- 1008 北宋の真宗に「大中祥符」が天降り、道教尊崇が進行。真宗は泰山で封禪。  
しんそう だいちゆうしやうふ

- ・藤原道長 (966-1028) 1007 金峰山埋納「経筒」 1024 有馬温泉
- ・白河天皇 (在位 1073-1086→1086 上皇・1096 法皇) 熊野参拝 9 回
- ・増誉 (1032-1116) 1090 「熊野三山檢校」←白河上皇
- 1072 成尋じょうじんが、天台山・五台山をめざして入宋。さんてんだいごだいさんき『参天台五台山記』
- 1106 高麗の太史官らが陰陽地理書を編集して『海東秘録』を著わす。かいとうひろく
- 1111 大江匡房 (1041-) 没。『本朝神仙伝』
- 1114 北宋きそウの徽宗しんしょうせつの宮廷で神霄説 (天界の構造に関する新説) と雷法らいほうが広まる。
- ・後白河天皇 (在位 1155-1158→1158 上皇・1169 法皇) 熊野参拝 34 回
- 1167 王重陽おうちやうやうが山東に移動し、呂洞賓りどうひん・鍾離権しやうりけんの教えをもとに全真教を創始。
- 1168 栄西 (1141-1215) が入宋。
- 1206 重源 (1121-) 没。 ※平重衡の南都焼討→造東大寺勸進職 ※行基説話
- 1221 承久の乱 (→上皇方についた寺社勢力の没落→勸進・聖の活動の活発化へ)
- 1223 道元 (1200-1253) が入宋。
- 1228 頃 南宋はくぎょくせんの白玉蟾 (1194-) が内丹と雷法を集大成。かいけいはくしんじんごろく『海瓊白真人語録』など。
- 1254 橘成季『古今著聞集』 ※有馬温泉、行基による温泉開基伝説、温泉と薬師
- 1274 一遍が遊行を開始、熊野本宮で熊野権現の夢告を受ける。
- 1281 院による熊野行幸の終了 →熊野山伏・比丘尼による勸進活動の活発化 (熊野三山本願所)
- 1289 一遍 (1239-) 没。
- 1320 度会家行 (1256-1361) 『類聚神祇本源』成立。伊勢神道を大成。るいじゅうじんぎほんげん
- 1445 明の武宗の勅命により、道教の一切経である正統『道蔵』が完成。しょうとう どうぞう
- 1467-1477 応仁の乱
- 1478 足利義尚あしかがよしひさが泰山府君祭を挙行。
- 1484 吉田神社に「大元宮」(全国の神々を勧請) 創設。吉田兼俱 (1435-1511) 『唯一神道名法要集』。よしだかねとも
- 1578~96 李自珍『本草綱目』→1604 伝来、1937 和刻本 ※温泉と硫黄
- 1610 朝鮮の韓無畏 (1517-1610) が内丹書『海東伝道録』を著す。かいとうでんどうろく
- 1613 修験道法度
- 1666 朝鮮の洪万宗 (1643-1725) が仙人伝『海東異蹟』を著す。かいとういせき
- 1673 明から来て黄檗宗の開祖となった隠元 (1592-) 没。おうぼくしゆう いんげん
- 1711 貝原益軒 (1630-1714) 『有馬温泉記 (有馬湯山記)』
- 1768 内観法 (瞑想による修行法) を唱えた白隠禪師 (1685-) 没。『夜船閑話』など。はいこんせんし やせんかんな
- 1809 柘植彰常『温泉論』 ※有馬温泉
- 1817 『諸国温泉効能鑑』(改訂版) ※草津・有馬・那須湯本・城崎など
- 1843 平田篤胤 (1776-) 没。『赤県太古伝』『黄帝伝記』など。せきけんたいこでん こうていでんき
- 1868 神仏分離令

1872	修験道廃止令
1879	アントン・ヨハネス・コルネリス・ヘールツ『日本温泉案内』
1880	エルウィン・フォン・ベルツ『日本鉱泉論』、ヘールツ『日本温泉考』
1886	内務省衛生局『日本鉱泉誌』
1945	神道指令

以下、上記年表を参照しつつ、概要を述べる。中国では、古くから各地で山岳や河川の神に対する祭祀が行なわれていた。戦国時代を終わらせて中国全土を統一した秦の始皇帝は、各地を巡幸して勢威を示しつつ各地で祭祀をおこない、泰山（山東省）では封禪をおこなった（BC219）。以後、漢の武帝や唐の高宗・玄宗など多くの皇帝が泰山で封禪をおこなっている。特に、中華世界の東西南北中央に鎮座すると観念される聖地としての五岳（時代的変遷はあるが、現在の五岳は東岳＝泰山（山東省）、南岳＝衡山（湖南省）、中岳＝嵩山（河南省）、西岳＝華山（陝西省）、北岳＝恒山（山西省）とされる）の祭祀は、国家祭祀の体系に組み込まれ、歴代の王朝において重要な位置づけを与えられた。後漢末期に現れた天師道の教団（教義や儀礼など多くの面で、道教の源流とされる）は、二十四「治」という各地をネットワーク化した組織を有していた。

多数の山岳聖地を体系的にネットワーク化する観念は、後に道教の「洞天福地」（神仙の統治する各地の山岳聖地に洞窟があり、それは仙界への入口・通路であると同時に他の山岳聖地・洞窟と相互に通じている。洞天は地上に実在する場所であると同時に地上とは異なった時空＝神仙の世界でもあり、神仙の降臨や經典・秘訣の伝授が起こる場所であり、仙人修行に適した優れた気の流れている場所である。その地上の配置は天界の星＝神の座の配置とも対応しているとも考えられる）として体系化される。その形成史の詳細については現在も研究と議論が続いているが、王屋山（河南省）とその山中の洞窟を聖地として崇拝する信仰を有していた天師道系の集団が、晋の南遷（西晋→東晋）とともに江南へ移動し、土着の宗教伝統と融合しながら、各地の山岳聖地をネットワーク化する信仰を形成していったと考えられる。それを主導したのは、王屋山で修行したと伝えられる魏夫人（魏華存）という女仙を崇拝し、茅山（江蘇省）を拠点に、多くの神霊の降臨を筆記して宗教文書を作成していた（おそらくは天師道系の）集団である。これに関連した宗教文書群は、陸修静が「三洞」説に基づいて道教經典を集成した目録を皇帝に献上した（467年）際には、「上清」經典群として最上位に位置づけられた。東晋の葛洪の『抱朴子』（317年）にはすでに後に「洞天」とされる多くの山岳の名称が紹介されているが、5世紀末に茅山に入った陶弘景（456～536年。道教のみならず、天文・暦・医薬・占・地理など諸学に通じ、梁の武帝の尊崇を受けた。著作に『神農本草經集注』『補闕肘後百一方』など）が、茅山における神霊の降臨記録を厳選して編纂した『真誥』<sup>しんこう</sup>には、「洞天」の具体的

描写がある。これらをもとに、唐代の司馬承禎（647～735）の『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二十七所引）に於いて、十大洞天・三十六小洞天・七十二福地の体系が確立する。<sup>7</sup>

中国の宗教文化の日本への流入は、古くから連綿と続いてきた。記録が少ない時代の詳細はわからないが、5世紀の倭の五王（讚・珍・斉・興・武）の南朝への入貢、6世紀の百済經由の仏教伝来、7世紀からの遣隋使・遣唐使の派遣、唐・新羅の連合軍による百済の滅亡と百済遺民の大量移住、さらに高句麗や渤海をも含めた国際関係の中での律令国家形成過程などを考えただけでも、公式・非公式の多様なルートを通じて、宗教や医学や天文暦法や占いや呪術の書籍や知識（しかもこれら多くの分野の知識は近代の学問領域のように明確に分かれているわけではなく、当時の書籍や個人の中では分かちがたく融合している部分が多い）が大量に流入していたことは確実である。ただし、このころの日本は、仏教を受容する一方で、唐の勢力範囲に組み込まれずに独立性を保つため、当時の唐の国家宗教（唐皇室の先祖祭祀）たる道教を公式に受容することには消極的であった。このため、日本には公式・組織的な道教の伝来はなかったと考えられている。したがって、個々の道教関連の信仰の要素や知識や文献が、倭の五王や遣隋使・遣唐使の時代から伝来していたかどうかを具体的に確定するのは難しい部分がある。とはいえ、日本では、6世紀～7世紀頃には山岳修行者が現れており、7世紀には役の行者（役小角）の山岳修行や信者の存在が記録されている。役行者は、賀茂氏の出身で、葛城を拠点に活動し、鬼神を使役する呪術を使い、弟子に訴えられて民衆を惑わせたかどで699年に伊豆へ流されたと伝えられる。<sup>8</sup>配流後の活動についてはよくわからないが、富士山や全国を巡って修行したという伝説が形成された。大宝律令（702）による山岳修行者の統制がおこなわれていることから、奈良時代には山岳修行者が増加していたことがわかる。9世紀初めの成立と考えられる『日本霊異記』には、

「役優婆塞者，賀茂役公，今高賀茂朝臣者也。…仰信三宝，以之為業。每庶掛五色之雲，飛仲虛之外。携仙官之賓，…吸啖養性之氣。所以晚年以四十余歲，更居岩窟，被葛餌之松，沐清水之泉，  
濯欲界之垢，修習孔雀之咒法，証得奇異之驗術。驅使鬼神，得之自在。唱諸鬼神而催之曰，  
大倭国金峰与葛木峰，度椅而通。…」

とあり、「優婆塞」「三宝」「五色の雲」「孔雀の咒法」仏教・密教のイメージとともに、仙人・仙界（「飛仲虚之外。携仙官之賓」）、気の吸入や辟穀（穀物を絶ち松などの木の実やキノコや雲母などを食して身心の気を変化させる）などの養生術（「吸啖養性之氣」「被葛餌之松，沐清水之泉」）、仙術（「驅使鬼神，得之自在」）、おそらくは山中の岩窟における修行（「更居岩窟」）、大和葛城山と吉野金峰山を（鬼神に命じて）連結した（「唱諸鬼神而催之曰，大倭国金峰与葛木峰，度椅而通。」）など、道教系の山岳信仰や洞天説の影響を濃厚に感じさせるイメージが現れ

ている。

時代は少し下るものの、宇多天皇寛文年間（889—897）成立の藤原佐世（？—892）『日本国見在書目録』には、道家類として、『老子』（河上公注、王弼注、唐玄宗御注…）、『太上老君玄元皇帝聖化経』、『莊子』（司馬彪注、郭象注…）、『南華仙人莊子義類』、『列子』、『抱朴子内篇』、『広成子』、『本際経』、『太上靈寶経』など、五行家類として『三甲神符経』、『太一経』など、医方家類として『黄帝素問』、『黄帝八十一難経』、『太清神丹経』、『太清金液丹経』、『神仙服薬食方経』、『五岳仙薬方』、『葛洪肘后方』、『葛氏百方』、『葛氏肘后方』など、多数の道教関連の文献（上述の葛洪や陶弘景の著作も見られる）が記録されている。無論、『日本国見在書目録』に記載されていない道教文献も多くあるため、道教系の知識が網羅的に流入しているとはいえないものの、上述のような用語の使用、山岳修行者の拡大、8世紀の行基の遊行や勧進活動に代表される宗教と社会の状況、入唐留学生や多数の渡来人の存在、さらに唐・新羅・日本の商人や宗教関係者などによる非公式の往来活動も想定できることなども考えあわせれば、仏教の知識や文化とともに、道教系の呪術や山岳信仰の知識や文化は、日本の山岳宗教や修験の形成期から流入していると考えられる。

真言宗や天台宗と山岳信仰・修験の関わりについても、ごく簡単に整理しておく。空海（774—835）は、大滝岳、室戸岬、金峰山など、山岳や洞窟や海岸などで修行したと伝えられ、唐の長安で密教を学んで帰国した後は、高野山を開いていることからわかる通り、山岳修行と密接な関係を有している。<sup>9</sup> 真言宗の聖宝理源（832—909）は、役行者にならって金峰山で修行し、金峰山の整備をおこなった。このため、役行者以来の「修験道再興者」とのイメージが確立し、後に修験道の当山派（醍醐寺三宝院）の開祖とされた。

最澄（767—822）が比叡山を天台宗の本拠とした後、円仁（794—864）、円珍（814—891）など比叡山で修行した高僧は多数にのぼる。下野（栃木）出身の円仁は、比叡山で修行した後、最澄に従って東国を布教して巡っている（816年）。838年に遣唐使船で唐にわたると、五台山を巡礼し、長安に行き、会昌の廃仏（845年）に遭遇、847年に山東省を經由して帰国している。その記録が『入唐求法巡礼行記』である。円仁は長安に向かうときにも帰国するときにも苦労しているが、その際に山東の新羅人集団（張保臯／張宝高（790頃～846?）が率いていた海上勢力）の支援を受けており、山東省の赤山の信仰（赤山神）も持ち帰っている。<sup>10</sup> このように巡礼や山岳信仰と関係が深い円仁は、帰国後にも各地に寺院を開基したと伝えられ、円仁による開湯伝説も多いが、行基や弘法大師空海と同様、虚実ないまぜのイメージが形成されている。天台宗の相応（831—918）は法華経を持し断穀や回峰行をおこなった。大納言藤原経輔を父とする天台宗の増誉（1032—1116）は、葛城山・大峰山で修行したと伝えられる。白河上皇の熊野参詣の先達をつとめ、1090年には初代「熊野三山検校」に任じられ、聖護院を建立した。この

系統が本山派である。

平安末頃までに、吉野金峰山（御岳。役行者と「金剛蔵王権現」湧出の伝説）、熊野（本宮・新宮・那智。「熊野十二所権現」）のほか、木曾御嶽、伯耆大山、羽黒、白山、日光、富士、彦山などでも修験・山伏の組織的活動が行なわれるようになっていた。吉野や熊野では、藤原道長（966-1028）による金峰山での「経筒」埋納（1007）、白河天皇（在位 1072-1086→上皇・法皇）の熊野参拝（9回）、後白河天皇（在位 1155-1158→上皇・法皇）の熊野参拝（34回）など貴族や天皇・上皇・法皇との結合による隆盛をみた。

鎌倉から室町（12世紀～15世紀）にかけて、修験の各山では、開山縁起が作成され、崇拜対象・儀礼・組織が整えられた。鎌倉初期成立の『諸山縁起』の「金峰山本縁起」は、役小角の開山伝承とともに、大峰山中には120の「宿」と380人の「仙人」が存在し、三重の「岩屋」（下；阿弥陀曼荼羅、中；胎蔵界曼荼羅、上；金剛界曼荼羅）があるとし、道教的要素も抱負である。「金峰秘密傳」（鎌倉中期）には、役小角が金峰山で「金剛蔵王権現」の湧出に出会う説話が現れる。<sup>11</sup>

九州の英彦山（1792年、霊元法皇の院宣により「彦山」を「英彦山」に改称）に関しては、「彦山流記」（1213）に、役小角、蓬萊山、崑崙山、彦山、寶満山、西王母石室といったことが現れている。また、さらに下って「彦山縁起」（元禄7年1694）には、継体天皇25年（521年）に北魏の善正によるという開基伝説、「四十九窟」の存在が記されている。<sup>12</sup>

### 3 温泉信仰——温泉行幸・地獄・地藏・薬師信仰・湯治文化

中国の西安近郊の驪山温泉の「華清池」は、白居易の「長恨歌」などによって日本でも有名な唐の玄宗と楊貴妃の故事の舞台であり、現代では観光地となっている。驪山に温泉があることは戦国時代以前から知られていた。秦の始皇帝が自らの陵墓として死後の地下宮殿を作ったのも驪山である（秦の都の咸陽は、驪山と西安の近くである）。始皇帝は、中国を統一（BC221）すると全国を巡行してその勢威を顕示しつつ、各地で祭祀をおこなっており、BC219年には泰山で中国全土の支配者として天を祀る「封禪」を挙行している。『史記』には「二十七年（BC219）、始皇巡隴西、北地、出鷄頭山、過回中。・・・更命“信宮”為“極廟”、象“天極”。自“極廟”道通“驪山”、作“甘泉前殿”。」という記述もある。「天極」に繋がる「甘泉」というイメージが存在していることになり、驪山の温泉が聖性を帯びていることがうかがえる。驪山温泉については、後漢の張衡の「温泉賦」<sup>13</sup>、唐の太宗（李世民）の「温泉銘」といった作品も存在し、神仙のイメージと結びついている。不死の神仙世界に通じる聖地としての温泉と皇帝・国家との結びつきという観念が、おそらくは遣隋使・遣唐使のルートを介して時代に日本に流入し、

『日本書紀』に記録される舒明天皇や孝徳天皇の有馬温泉行幸に影響している可能性を想定できる。<sup>14</sup> こうした観念は、温泉も瀧も、熱／冷の差異はあれ、神霊につながる聖なる水の聖地としてみるならば、後の天皇・上皇・法皇の熊野参詣などにも連続と流れている感覚であるかもしれない。

温泉と宗教の結びつきのわかりやすい実例として、温泉寺・温泉神社の存在がある。温泉神社には、大己貴（大国主）と少彦名を祭神とする例が多いが、日本の神社の祭神は江戸・明治以降に設定されたものも多く、また、仏寺・神仏習合であったものが、明治期に神社に変えられてしまった例も多いので、個別の事例ごとに注意が必要である。『延喜式』『神名式』（967）には、有馬温泉の「湯泉神社」、伊香保温泉の「伊香保神社」、那須湯本温泉の「温泉（ゆぜん）神社」、鳴子温泉の「温泉神社」、道後温泉の「温泉神社」などの例が載っており、温泉神社のもともとの形態は、地元の温泉の「湯の神」を祭祀したものであろうという見方が強い。

温泉と地獄・地藏・薬師信仰の結びつきについてもみておきたい。中世から現代に至るまで、温泉周辺の火山性ガスや熱蒸気の吹き上がる場所は、その景観や動植物の枯死の実例などから「地獄」「賽の河原」などと呼ばれ、地獄から救済してくれる地藏の信仰と結びついている例は多い。現代の温泉地でも、箱根大涌谷、恐山など多くの例があるが、各地の温泉と地獄・地藏との結びつきについては、それぞれ固有の歴史や変遷があり、単純に一般化はできない。<sup>15</sup>

日本では、源信（942-1017）の『往生要集』（985年）を画期として、具体的な地獄・極楽のイメージが流布していったといわれる。10～11世紀に中国で成立・流布したらしい『預修十王経』によって、日本にも地獄の裁判官である十王（閻魔を代表とする）がもたらされた。しかし、浄土教系の聖の活動などにより、地獄からの救済者としての地藏菩薩への信仰が強かった日本では、『預修十王経』をそのまま受容されることなく、12世紀頃に、十王のそれぞれに本地仏が設定された『地藏十王経』が成立し、閻魔の本地仏を地藏とする信仰が広まり、地獄・十王信仰と地藏信仰が結合することになったようである。

温泉と薬師の結合については、薬師如来が治病の仏であるところから、温泉との結びつきは自発的なものとみなされがちであるが、この結合は歴史的に特定の場所（有馬温泉）で形成され、有馬温泉と熊野の結びつきを背景に、聖や比丘尼の活動を介して意図的に全国化していったものと考えられる、という指摘が、西尾正仁（注1、前掲書）によってなされている。それによれば温泉薬師信仰の形成史は以下のように整理される。

・温泉薬師信仰の源流となったのは有馬で発生した行基開湯伝説であり、<sup>16</sup> その伝承が縁起に移植されていた昆陽寺（伊丹）の再興のために集まっていた重源らの勸進聖の集団が伝承の二次管理者となり、さらに東大寺の勸進に参加していた山岳宗教者（山中で温泉を発見し経営するものを含んでいた）が昆陽寺の勸進聖との交流を介して行基伝説の伝播を担うとともに、

自らの経営する温泉にその伝説を持ち込み、薬師如来を祭祀するようになり、いったん成立した薬師如来の祭祀は行基開湯伝説をもたない温泉にも広がっていった。

・これとは別に、南北朝以降、京都貴族の没落によって困窮した熊野ではより広範な層への熊野信仰の浸透を図って勧進活動を展開するようになり、そこに時宗系の勧進聖が流入し、熊野や温泉と深い縁のある一遍を受け継ぐこれらの勧進聖は湯峰温泉に入って経営に着手するとともに関東地方で醸成中であった小栗判官伝説を湯峰温泉と結合して完成させ、これによる唱導を展開した。

・応仁の乱以降、有馬温泉では貴族の来訪が減少するとともに、度重なる火災により荒廃が進んだため、温泉寺と温泉の復興のための勧進活動が活発化し、そこに熊野から加わった者たちは、温泉経営の奪取をはかり、先行の行基開湯伝説や尊恵蘇生譚に対抗して仁西(熊野山伏)による有馬再興伝承を作り出して正統性を主張した結果、有馬に熊野信仰が浸透した。一方、有馬と熊野の交流が盛んになると、有馬で形成された地獄と薬師の結びつきや行基開湯伝承も熊野へ持ち込まれてゆくことになった。

温泉と地獄・地藏信仰の結びつきの例と同様、温泉と薬師信仰の結合についても、個別の事例ごとに考察することが必要ではあるが、明確な温泉薬師信仰が有馬で形成されたものであること、勧進聖や熊野との結びつきなど、大筋としては的確な見方であろう。

温泉・湯治場では、行基・空海・円仁・役行者などの山岳修行や広範な布教巡礼のイメージの強い宗教者、地藏や薬師などの神仏やその使いとしての動物、源頼朝や武田信玄など有名武将などに結びつけられた開湯伝説、源泉と結びついていることの多い共同湯および湯治場、薬師や地藏や観音などを本尊とする温泉寺や温泉神社、温泉の効能や神仏の加護による「治癒」の実績と信仰とが結合し、これに旅館経営や観光・巡礼・旅行などの要素が加わって、聖俗兼ね備えた「治癒文化」が現出している。これらの起源には古代や中世までさかのぼることができるものも多いが、新しい要素や変化も多く、特に湯治や旅や巡礼が階層・規模ともに飛躍的に大規模化するの江戸時代以降であり、鉄道開発と結びついた大規模観光・保養地化が進むのは明治以降である。

## 結び

以上、「治癒文化」の広がりという観点から、道教と修験を中心とする中国と日本の山岳信仰の歴史、中国の温泉と日本の温泉、日本における温泉信仰について、ごくおおまかではあるが基本的な整理を試みた。日本独自の要素や差異があまたあるのはもちろんであるが、中国の山

岳信仰や温泉のイメージが日本の山岳信仰・温泉文化に与えた影響もかなり大きなものであったことが明らかになったと思われる。一方で、火山や鉱山との結びつきや、各時代の「湯治」の実態や江戸明治以降の大規模化の経緯、明治政府の宗教政策がもたらした修験道への巨大な影響と第二次大戦後の変化など具体的に触れなかった要素も多い。最も大きな課題としては、中国でも日本でも、山岳信仰は海洋信仰とも結びついているという問題がある。天空に繋がる高地としての山岳と、水平線の彼方の異世界に繋がる海とは、宗教的イマジネーションにおいて共通・結合する部分を持つ。また、海から見えやすく航海の目印になる山岳の役割やその山への信仰、熊野の山岳信仰と渡海、陸路と海路の移動・交易・布教のルートなど、実際の自然環境や地形や人々の活動に関する事例も数多い。これらについても、今後の課題として研究を継続することとしたい。

---

<sup>1</sup> 温泉と薬師信仰の結びつきについての詳細な研究として、西尾正仁『薬師信仰—護国の仏から温泉の仏へ』岩田書院 2000 がある。

地質学や医学など科学的視点からの研究、経済史や社会史的や観光学な研究や一般向けの書籍などはもとより膨大で紹介しきれないが、本論の関心に近く総論的なものとして、日本温泉科学会編『温泉学入門—温泉への誘い—』コロナ社 2005、日本温泉文化研究会『論集温泉学Ⅰ 温泉の文化誌』岩田書院 2007、同『論集温泉学Ⅱ 湯治の文化誌』岩田書院 2010、同『論集温泉学Ⅲ 温泉の原風景』岩田書院 2013、同『温泉をよむ』講談社学術文庫 2011、高橋陽一『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』、石川理夫『温泉の平和と戦争』彩流社 2015、同『温泉の日本史』中公文庫 2018 などを挙げておく。

定期刊行の研究誌として、日本温泉科学会『温泉科学』（1941～続刊）、日本温泉地域学会『温泉地域研究』（2003～続刊）がある。各学会の HP には、最新の活動や成果報告のほか、温泉研究に関する参考文献一覧も掲載されており参考になる。

日本温泉科学会 <http://www.j-hss.org/>

日本温泉文化研究会 <https://onbunken.jimdofree.com/>

日本温泉地域学会 <http://onsenchiki.web.fc2.com/>

辞典類としては、野口冬人編『全国温泉大事典』旅行読売出版社 1997、阿岸佑幸編『温泉の百科事典』丸善出版 2012、大石真人編『全国温泉辞典』東京堂出版 1981、浦西和彦編著『温泉文学事典』和泉書院 2016 などがある。

<sup>2</sup> 日本の山岳信仰・山岳宗教・修験道の研究史は、膨大な蓄積がある。柳田國男から、和歌森太郎や五来重、宮家準などによる、広い視野と豊富な事例からなる総合的な研究が、その研究方法や問題意識を継承するにせよ、批判的に再検討するにせよ、まずは基本ベースとなる。先行研究の方法論を批判的に再検討する必要を明確に打ち出しているものとして、時枝務・長谷川賢二・林淳（編）『修験道史入門』岩田書院 2015 がある。以下、網羅的に挙げることはできないが、基本的な研究文献を記しておく。

和歌森太郎・五来重『山岳宗教史研究叢書』全 18 巻、名著出版 1975～1984。和歌森太郎『修験道史研究』河出書房 1943、東洋文庫 1972 『山伏』中公新書 1964。五来重『山の宗教 修験道』淡交社 1970、『五来重著作集』法蔵館 『熊野詣 三山信仰と文化』『石の宗教』五来重、講談社。宮家準『修験道儀礼の研究』春秋社 1971、増補決定版 1999、『修験道思想の研究』春秋社 1985、増補決定版 1999、『修験道組織の研究』春秋社 1999、『修験道の地域的展開』春秋社 2012、『修験道—その歴史と修行』講談社学術文庫 2001、『霊山と日本人』、『日本の民俗宗教』講談社、『修験道—その伝播と定着』法蔵館 2012。村山修一『山伏の歴史』塙書房 1970、『日本陰陽道史総説』塙書房 1981、『修験・陰陽道と社寺資料』法蔵館 1997。鈴木正崇『山岳信仰』中公新書、『明治維新と修験道』（『宗教研究』392 号、2018 年）。日本山岳修験学会 [www.sangakushugen.jp/](http://www.sangakushugen.jp/) 『山岳修験』（1985～、年二回発行）。鈴木昭英『修験道歴史民俗論集 1 修験教団の形成と展開』法蔵館 2003、『霊山曼荼羅と修験巫俗』法蔵館 2004、『越後・佐渡の山岳修験』法蔵館 2004。銭谷武平『役行者伝記集成』東方出版 1994。森毅『修験道霞職の史的研究』名著出版 1989。大和久震平『古代山岳信仰遺跡の研究』名著出版 1990。宮本袈裟雄『里修験の研究』吉川弘文館 1984（岩田書院 2010）、『天狗と修験者 山

岳信仰とその周辺』人文書院 1989、『里修験の研究 続』岩田書院 2010。新城美恵子『本山派修験と熊野先達』岩田書院 1999。時枝務『修験道の考古学的研究』雄山閣 2005、『霊場の考古学』時枝務、高志書院選書 2014、『山岳宗教遺跡の研究』岩田書院 2016、『山岳霊場の考古学的研究』雄山閣 2018。時枝務・長谷川賢二・林淳(編)『修験道史入門』岩田書院 2015。林淳『近世陰陽道の研究』吉川弘文館 2005、「神仏混漚から神仏習合へ」(芳賀祥二編『近代日本の地域と文化』吉川弘文館 2018)。

<sup>3</sup> 土屋昌明研究代表「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2009-2011)、「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2012-2015)、「中国道教における聖地と巡礼に関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2016-2018)、「道教の洞天思想における聖地と巡礼の調査研究およびその東アジア思想文化史への影響」(基盤研究(B) 2019-2021)。筆者はこれまでに、科研の共同調査として、中国の赤城山(浙江省)、委羽山(浙江省)、括蒼山(浙江省)、蓋竹山(浙江省)、嵩山(河南省)、華山(湖南省)、終南山(陝西省)、王屋山(河南省)、茅山(江蘇省)、羅浮山(広東省)、廬山(江西省)、西山(江西省)、麻姑山(浙江省)など、個人調査として青城山(四川省)、峨嵋山(四川省)、恒山(河北省)、泰山(山東省)、武夷山(福建省)、勞山(山東省)、赤山(山東省)などを調査した。洞天福地については、三浦國雄『洞天福地小論』『東方宗教』61号、1983(『風水一中号人のトポス』平凡社ライブラリー1995)、Stephen R. BOKENKAMP, *The Peach Flower Font and The Grotto Passeege*, *The Journal of the American Oriental Society* 1986、Terry F. KLEEMAN, *Mountain deities in China: the domestication of the mountain god and the subjugation of the margins*, *The Journal of the American Oriental Society* Vol.114 No.2 (April-June 1994) pp.226-238、李遠国「洞天福地：道教理想の人居环境及其科学価値」(『西南民族大学学報』2006/12)、木健郎「洞天的基礎的考察」(田中文雄・テリー・クリーマン編『道教と共生思想』大河書房、2009年)、洞天福地研究会『洞天福地研究』1-8号、2011年-2019年(継続刊行中)所収の諸論文などを参照。

<sup>4</sup> 中国の火山については、江原幸雄『中国大陸の火山・地熱・温泉』九州大学出版会 2003などを参照。

<sup>5</sup> 桂博史『中国温泉探訪記』岩波書店 2007は、中国の温泉の歴史と現状について、日本の温泉の歴史との対比もおこないつつ、紹介・考察している。

<sup>6</sup> 例えば、「修験道の開祖」として伝説化されている役行者が、妖言をなしたかどで 699年に伊豆に流されたとする日本書紀の記録などから、山岳修行者・信者集団の存在、ある程度の規模の宗教活動が推測されている。

<sup>7</sup> 『道蔵』22-198。文中に司馬承禎への言及を含むため、後世の改変が加えられていると考えられるが、基本的には司馬承禎の著作とみなす。司馬承禎による洞天福地は唐の領土に広く分布し、特に江南地域に集中しているが、洛陽近郊の王屋山が第一洞天とされ、伝統的な国家祭祀の対象である五岳が「小洞天」の第二～第五として「十大洞天」の下位に位置づけられているなどの特徴がある。これは、上述のような洞天信仰形成の経緯、および道教を皇室の先祖祭祀と結合した国家宗教として位置づける(李姓の老子を唐の皇室の先祖とし、唐の建国に際して老子の助けがあったという伝説を流布し、各地に道観を設置し、道土による儀礼をおこなう)ことで仏教勢力や名門貴族勢力を抑制しつつ皇室と国家の権威を高めるという政策を反映している。

<sup>8</sup> 「役君小角、流於伊豆島。初小角住於葛木山、以咒術称。外従五位下韓國連広足師焉。後害其能、讒以妖惑、故配遠处。世相傳云「小角能役使鬼神、汲水採薪。若不用命、即以咒縛之」(『続日本紀』文武天皇三年(699))

<sup>9</sup> 高野山の開山伝説では、空海が真言密教に最もふさわしい土地に落ちよと念じて唐の長安から投げた三鈷所が、狩場明神の使いである二匹の犬の導きで、松の木に引っ掛かっているのを発見したとされ、温泉発見伝説の典型の一つである(神の使いとしての)動物発見説話と共通するパターンを示している。

<sup>10</sup> 京都の赤山禅院は、円仁の遺志によって建立された寺院で、赤山明神を祀る。

<sup>11</sup> 中世の山岳宗教・修験は法華経との関わりが深く、金剛蔵王権現が「湧出」するのは、妙法蓮華経の「従地湧出品」での菩薩の出現をトレースしたものと考えられる。

<sup>12</sup> 中野幡能「英彦山と九州の修験道」(山岳宗教史叢書13)などを参照。筆者は、2018年に英彦山を調査したが、般若窟など英彦山中の洞窟やそこに立てられたお堂などの環境や形状は、中国の諸洞天に見られるものと非常に類似している。

<sup>13</sup> 張衡『温泉賦』「陽春之月、百草萋萋。余在遠行、顧望有懷。遂適驪山、觀温泉、浴神井、・・」。張衡は中国科学史の著名人であり、天文・暦法・数学・地理などに顕著な業績を残している。文学作品には「埽田賦」などがある。

<sup>14</sup> 桂博史、前掲書参照。同書では、『日本書紀』の温泉に関する記事の文が『水経注』の直接的影響を受けていることも指摘されている。

<sup>15</sup> 宮崎ふみ子「霊場 恐山の地蔵と温泉」『論集温泉学 I 温泉の文化誌』岩田書院 2007によれば、恐山

---

の霊場には薬師信仰から地藏信仰へ変遷がみられるという。そのほか、柘植信行「中世箱根における温泉と地藏信仰」(『論集温泉学Ⅱ 湯治の文化誌』岩田書院 2010、柘植信行「中世「熱海」の信仰空間—温泉を背景とした霊場の形成と展開—」(『論集温泉学Ⅰ 温泉の文化誌』岩田書院 2007)などを参照。

<sup>16</sup> 温泉薬師信仰に関する最古の明確な伝承は、『古今著聞集』(1254)に見える昆陽寺(大阪伊丹)の開基伝承(行基が有馬に向かう途上で、「温泉の行者」を名乗る生身の薬師と出会うという説話)であること、各温泉の開湯伝承では行基によるとするものの分布が顕著であり、しかも薬師如来と関係が深いことから、温泉薬師信仰の源流は有馬での行基開湯伝承であるとする。さらに、その伝説は12世紀に有馬温泉を開発・運営した天台系の聖が作成し、街道筋の昆陽寺へ持ち込んだものと推測している。